
俺の新しい物語

テロット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の新しい物語

【Nコード】

N5861N

【作者名】

テロット

【あらすじ】

俺は不幸なのか？どっかの誰かさんみたいに右手で幸福ぶつ殺してないんですけどっ！？なんだよこの世界……。俺を召喚した張本人は嫌われ者？だし、無愛想な青髪娘は気持ちがよーわからん……。ロリっ娘は誘惑するから理性がもたんし、メイドさんは暴走するわ……。俺疲労で余計ハゲそうだ……。orz
まあ、でも、俺は守るよ。この世界。この日常。俺の大事な人達を。

みんなに一言

突然ですが、みなさんは異世界を信じますか？

魔法が当たり前の世界。剣で戦いあう世界。魔物・悪魔がいる世界。そんな世界があると思いますか？

俺は行けたら楽しいだろうなあ〜と思ってたが、全然信じていなかった。小説やラノベ、アニメではよく描かれるが、誰もそんなこと信じていないだろう。異世界はあるなんて話をガチでしようものなら、「は？お前頭大丈夫かよ」。宗教の勧誘なら他でやれっつのにギヤハハハハ！！！」と言われるのがオチだ。

だが、もし！もしも！異世界に行けたらどう思う？うれしいか？ワクワクするか？これからの人生に夢を馳せるか？だが、考えてもみる。その世界には家族も友達も、知り合いすらない。孤独なんだぞ？頼れるやつがいらないんだぞ？助けを求めても、小説なんかみたく手を差し延べてくれるかわかんない。

だから異世界なんか、間違っても行きたいなんか思っちゃダメだ！え？なんでそんな事言うかって？そりやお前、

「俺が異世界に来ちまったからだよおお！！！！！」

「うるっさい！！！」

ドカンッ

……私、神宮秋人はこの度赤髪の女性に異世界へ召喚されました
orz

始まり（前書き）

どうも〜テロットです。

若輩者ながら小説を投稿させていただきました！！

ファンタジー小説が好物でして、なかなか好きな小説が見つからなかったものですから、それなら作っちゃえというわけではぼ思いつきで書いてます。

拙い文章ですが、私の自己満小説で楽しんでもくれる人がいるなら、それほど嬉しいことはありません！！

まだ本編には入りませんが、続きをどうぞ！！

始まり

「あなた、誰？」

この言葉が俺の新しい世界での、新しい物語の始まりとなった。

その日俺はじいちゃんと修業をしていた。

じいちゃんは今時珍しく武道などの剣道ではなく、実践向きの実践剣術を教えている。まあ、生徒なんか俺ぐらいなものだが。しかし、この剣術意外とすごい。1対1はもちろん、1対多を想定した戦い方。獣なんかを相手にしたとき、得物がないときなど、どんな状況でも戦えるようになる。あくまでも実践向き。舞や武芸には程遠い、人を殺し、生き残り、そして、人を守るための流派だ。

そんな流派の名は「飛流」と書いて、「ひりゅう」。俺の知ってる数々の流派の中でも最強だと思っている。

俺はこれを4歳の頃から習っていて、もう今年で13年目だ。小学生の頃は友達と遊べなくて修業が嫌で嫌で仕方なかったが、中二の頃不良に絡まれてた女の子を助け、お礼を言われた時には、力をつけるのも悪くねえかもな、なんて思うようになった。

「飛流」は心を育てる面を持つ。いくら力があっても、「守りたい」という意思の前ではとてもちっちゃなものに見えるらしい。俺にはまだよくわかんないけど、そういうもんなんだと思う。ヒーローもの特撮やアニメは好きだったから、なんとなくだが納得は出来た。だから「飛流」は心身共に鍛えることが出来る。「お前すげえよな」。顔はめちゃくちゃかっこいいし、勉強、運動両方トップ。強いし、人格も出来てる。こ、この完璧超人がー！！」最初は普通に話

しかけてきたのに、何故か途中で泣きはじめて走っていつてしまった友人A。お前は何がしたかったんだ、と心の中でばやきながら、やっぱり言われた事が嬉しかったからちよつと笑ってしまった。その瞬間足を止めて、何やら熱のこもった視線を飛ばしてくる女生徒が多数。どうしたんだ？俺の笑顔気持ち悪かったかな？と考えたのが一週間ぐらい前の話。未だに視線の意味がわからん。

「おい秋人！集中しろ！」

「は、はい！！」

いかんいかん。怒られてしまった。あ、そういえば自己紹介がまだだったな。俺の名前は神宮秋人^{しんぐうあきと}。ピッチピチの17歳だぜ。

「飛流一式」

飛流には零式から三式まである。零は徒手。一式は対個人で二式は対集団。三式は対獣や人外と、使い分ける。まあ実際にはそんな大差ない。だって全部強いんだもん。少し動きやすい、戦いやすいってぐらいだ。

今じいちゃんとお互いにやっている一式の構えは所謂居合の構えだ。真剣での戦いは一撃で決まる。相手より速く、より強くぶち込むには居合が一番いい。だからじいちゃんとの修業も一撃で終わるからすごい早く決まる。今までじいちゃんには勝つたためしがない。悔しいけど、じいちゃんは化け物だからしょうがないんだよ！結構三式でやったほうがいいかもしれないな。

「飛流一式 飛竜爪！！」

俺が使った技は下段からの斬り上げの時に同時に飛び上がるものだ。

居合の勢いと飛び上がる勢いで力が何倍にもはね上がる。弱点は飛び上がった時に隙だらけになるところだが、俺の場合はならない！何故かといえば、俺は技との相性がいいのか衝撃波も出るからだ！……………どここのマンガだよと思ったやつ。今から正座で読みなさい！さて、じいちゃんは俺の飛竜爪に対し、

「飛流一式 狼牙！！」

狼牙とは目にも止まらぬ速さで三連続の居合を行う技だ。俺にはそんなのどうやりやいいかわからん。だって刀を鞘に入れようとする時に目に止まっちゃうよ？じいちゃんのはほぼ同時だもの。やっぱり相性が……………。

一撃目で衝撃波を消し飛ばし、二撃目で俺の木刀をはじく、そして三撃目に俺の脇腹に直げ

「げふっ！」

きです。無残にも吹き飛ばされる俺。真剣なら真っ二つだね

「秋人、大丈夫か？」

じいちゃんが手を差し延べてくれたので、手を握って痛みに顔を歪めながら立ち上がる。

「いっつつつ……………。もう！手加減してよ！！狼牙なんか防ぎようがねえって……………」

「情けないのお。秋人も狼牙を身につければよかるう？」

じいちゃんは、さも習得出来るのが当然かのように提案してくる。

マジで不思議そうな顔すんのはやめろや…。

「無理だって。技にも相性があんの！前めちやくちや頑張ったけど、鞘に入れる時にずれて手にグサグサ刺さるから、青あざだらけになったんだぜ？」

あれはひどかった…。俺もじいちゃんみたく強くなりたいなーって思った時、一番始めに思い付いたのが狼牙の習得だった。二ヶ月ぐらい頑張ったけど、手がミツ。ーみたく大きくなって泣きたくなつたのを覚えている。

「ほっほっほっ。秋人もまだまだだのう。まあ、頑張ることはいいことじゃ。また挑戦してみなさい」

「ういゝ」

じいちゃんは普段は温厚な人柄だが、修業中は鬼のように恐い。まあその分教えるのは上手いからいいんだけど。

「今日はこれで終わりじゃな。これから行くところがあるんじゃない？」

「うん。この間整備に出した天斬り（あまぎり）が出来たって言ってたから、取りに行ってくる」

天斬りとは神宮家の家宝ともいえる刀だ。先祖様がこの刀を使って飛流を編み出したらしく、刀の中じゃ飛流に一番相性がいい。まあ、だとしても狼牙なんか出来ねえよ？ひたすら鞘から出し入れするしかないって。習得出来ればかなり強くなると思うんだけどな。

「そうか。……秋人」

「ん？」

「心を強く持て。諦めるな。自分の信じた道をいけ。そして、大切なものを…守れ」

じいちゃんがものすごく真剣な顔で言ってきた。何回も言われてることだけど、なんか今日のは「言うのはこれで最後だ」と、そんな感じに聞こえた。

「……………どうしたの？急に」

「なーに。じじいのただの戯れ事じゃ。早く行ってしまいなさい」

じいちゃんはいつも通りに見える。俺の思い過ごしか？

「んじゃあ、ちゃっちゃん行って、早く帰ってくるよ」

「帰ってくるかは秋人が決めなさい。じいちゃんは秋人が帰ってこなくても大丈夫じゃから」

「は？」

「いつてらっしゃい」

「……いつてきます」

（嫌な勘が当たらなければいいのじゃが……）

俺は駆け足で道場から出ていく。ジャージから着替えなきゃいけないからな。さすがにジャージ姿で街中を歩くのは気が引けるし。じいちゃんもなんか変だから早く帰ってきてやないと。

俺は知らなかった

これから

俺が世界から消えることを

守るべき人達が出来ることを

新しい物語が始まることを

始まり2

「ありがとうございます!!」

俺は店を出た。

さすがに刀をそのまま持ち歩くわけにもいかないから、袋に入れている。黒い布で作られており、白い紐で結ばれている。

刀の手入れは大変だ。俺も出来るには出来るが、やっぱりできるだけ専門家に任せたほうがいい。こいつも喜んでるだろうよ。今の時代、刀なんか鑑賞用にしか使われなくなった。本来の目的である「斬る」ということが出来なくなつて、こいつはどう思つてんのかな？

「さーて。さつさと帰つて、じいちゃんの様子でも見とくか」

なんか様子変だつたしな…

じいちゃんもついにボケてきたか？………じいちゃんには言わないようにしよ…殺されるな…

そういや、じいちゃんと暮らし始めてから随分たつたな…

俺には両親はいない。4歳の時に出張に行った帰りの飛行機が墜落して、帰らぬ人となつた。そのあとじいちゃんが俺を引き取つてくれたのだ。元気のなかつた俺に、「強くなれ、秋人」と声をかけてくれたおかげで今の俺がいる、と思つている。だからじいちゃんは俺にとって尊敬する人であり、信頼をおく人であり、家族。そんな存在だ。

さつきは変なこと言つてたけど、まだじいちゃんに勝ててないのに、どこも行けるかつての。

「っ！？…うぐっ…」

なんだっ！？

痛い…頭が割れそうだった…

っ！？

「ぐ、うう…う、うがあああああああ！……！！！！！！」

「明日が暗い」

「つまらない世界」

「明るい明日を」

「どうか私に」

「見せてくれませんか？」

薄れていく意識の中でそんな声が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5861n/>

俺の新しい物語

2010年11月2日09時20分発行